



特集
東日本
大震災から7年
―復興へ向けたバトソリレー―

巻末言 道



松永然道名誉会長と “ラブ・ミー・テンダー”

専門アドバイザー 大菅 俊幸

思い出話を一つ。1997年の1月、シャンティに入職して一年余りの時であったと記憶する。年度末に行われる予算調整会議が、東京都葛飾区にある「水元青年の家」で合宿形式で行われた。

当時のシャンティの会議は、熱血漢が多かったせい、事業に対する思い入れが強かったからか、怒号が飛び交うのも珍しいことではなかった。予算を削減せよ、といつも集中砲火を浴びていたのが私の属する広報課でもあった。

昼間の会議が終わって「やれやれ」と夕食を取って、ひと風呂浴びると、施設の音楽室にピアノやギターやボンゴがあるのを見つけた。当時のスタッフ、澤元さんと岩船さんに声を掛けて一緒に演奏を始めた。この三人は、それまで音楽活動をしてきた人たちで、意気投合してシャンティーズというバンドを結成したばかりであった。

気が付くと、その音につられて、音楽室にはほぼ全員のスタッフが集まっていた。湯上がりのタオルを頭に掛けて、浴衣姿の松永さん（名誉



故・松永然道老師（左）

会長）も有馬さん（初代専務理事）もいた。しばらくすると、つかつかと松永さんが来てこう言った。「私にも歌わせてくれる？」。そして始まった「Love me tender, Love me sweet, Never let me go〜」。何と、ロックの神様エルヴィス・プレスリーのヒット曲、『ラブ・ミー・テンダー』であった。歌い終わると万雷の拍手。「松永（名誉）会長が、このような歌を歌うとは……」。そんな歓喜の拍手でもあった。その場が一つになっていた。その後で松永さんは私にこう言った。

「そうだね。悲愴感だけじゃ駄目だよ。こうでなくっちゃね。大菅さん、ありがとう」私の気持ちを分かっていただけたようで、少しうるぎたのを覚えている。つくづく「シャンティに入ってよかった」と思った時であった。



気仙沼「あつまれ、浜わらす!」で
製作したいかだに乗って。
2015年撮影

2011年3月11日。日本はまだまだかつて経験したことがない規模の自然災害に見舞われました。あれから7度目の冬を迎えます。その間、我々は立ち止まることなく、人々に寄り添い、復興に向けて共に歩んでまいりました。復興が進む地域がある一方、いまだ震災前の暮らしを取り戻せていない地域もあります。2016年に気仙沼事務所が、2017年に岩手事務所と山元事務所の活動が収束しましたが、福島では今なお、人々に寄り添い、復興に向けて共に歩き続けています。震災から7度目の冬を迎えるにあたり、これまでの東日本大震災被災地支援事業を振り返り、新たに踏み出した一歩についてご紹介させていただきます。

Shanti vol.293 CONTENTS

4	特集 東日本大震災から7年 —復興へ向けたパトシリレ—
16	世界の絵本を読んでみよう 「ぶんぶん谷」(気仙沼 2012年出版絵本)
18	わたしたちのお祭り 気仙沼みなとまつり(宮城県気仙沼)
19	活動の現場からREPORT From 活動の現場 ▶岩手事務所 ▶南相馬事務所
28	シャンティな人たち 高橋美加子 北洋舎クリーニング代表取締役
30	SHANTI HISTORY 2011年 — 設立30年目に起きた大震災—
31	お知らせ/編集後記
32	道「松永然道名誉会長と“ラブ・ミー・テンダー”」 専門アドバイザー 大菅 俊幸



今号の表紙
岩手を走った移動図書館車。
2014年撮影



2017年3月 安波山から撮影した仙沼市内の様子

東日本 大震災から7年 ―復興へ向けたバトンリレー―

特集

シヤンティは阪神・淡路大震災の発生以後、本格的に国内外で緊急救援活動に取り組んできました。人間の尊厳と多様性を尊び、「共に生き、共に学ぶ」ことのできる平和（シヤンティ）な社会の実現を目指すシヤンティは、苦難の中にいる人々と痛み、悲しみ、喜びを分かちあい、共に歩むという基本姿勢を大切に、活動を行ってきました。

復興支援から次の一歩へ

地震発生3日後、シヤンティの三部副会長が、さらにその2日後、シヤンティのスタッフ2人が福島県および宮城県に調査に入り、3月16日から支援活動が始まりました。これまで国内外の災害現場で培ってきた緊急救援の経験を踏まえ、「被災者の自立支援」「生活の再建」「移動図書館を通じた被災者支援」「被災者の自立に向けた情報共有や政策提言」「生業再建支援」の5つの観点で、復興支援に携わってきました。

全国各地から復興のために力を貸してくださった皆さまと、現地の方々のご協力のおかげで、被災した方々に楽しみや心の安らぎ、そして憩いの場を提供することができました。そして震災から7年目の冬を迎えた今、それぞれの地域の復興状況を見据え、地元に役割が引き継がれ、

今もなお復興に向けて歩み続けている福島・南相馬では、人々に寄り添いながら、共に新たな一歩を踏み出し始めています。

これまでの国内災害における主な支援活動

シヤンティは、地域社会の再生を目標に、人と人との心の交流を支えることを心がけてきました。

支援活動時期	災害	対象区域
1995年2月～1997年3月	阪神淡路大震災	兵庫県神戸市長田区・兵庫区
2000年7月～2005年2月	三宅島噴火	東京都内の避難先
2000年10月～2000年10月	鳥取西部地震	鳥取県米子市
2004年7月～2004年7月	新潟・福井豪雨	福井県福井市、美山町、新潟県三条市
2004年10月～2004年11月	台風23号	兵庫県豊岡市
2004年10月～2005年5月	中越大地震	新潟県十日町市、小千谷市、長岡市、川口町
2005年2月～2013年12月	三宅島噴火	三宅島全域
2007年3月～2007年4月	能登半島地震	石川県輪島市
2007年7月～2007年10月	中越沖地震	新潟県柏崎市
2009年8月～2009年8月	台風9号	兵庫県佐用郡佐用町
2011年3月～継続中	東日本大震災	岩手県、宮城県、福島県
2013年8月～2013年8月	山口・島根豪雨	山口県萩市
2013年9月～2013年9月	台風18号	京都府福知山市
2013年11月～2013年12月	台風26号	伊豆大島
2015年9月～2015年12月	関東・東北豪雨	茨城県常総市
2016年4月～継続中	熊本・大分地震	熊本県熊本市、上益城郡益城町、阿蘇郡西原町
2017年7月～2017年7月	九州北部豪雨	福岡県朝倉市

沼、東京、熊本の子どもたちとの交流キャンプをシャンティと開催し、自然災害と隣り合わせの環境の中、いかに楽しく暮らせるかについて、子どもたちと共に学び合いました。住む場所が違うからこそ、暮らしの違いを

2017年の夏は、気仙沼、東京、熊本の子どもたちとの交流キャンプをシャンティと開催し、自然災害と隣り合わせの環境の中、いかに楽しく暮らせるかについて、子どもたちと共に学び合いました。住む場所が違うからこそ、暮らしの違いを

NPO法人 浜わらす

2015年末に向けて、シャンティの気仙沼事業を収束させることになりましたが、海に面した気仙沼に暮らす子どもたちが海を知らないままではないのか、という疑問と不安を感じていました。活動終了後もより多くのの人に海や自然の関わり

発見し、自然と共存した楽しい暮らしを、共有

NPO法人 代表
浜わらす 笠原一城さん



支援活動紹介
1

気仙沼事業

つながる人の和

復興プロジェクト気仙沼

シャンティが最初に東日本大震災の被災地で活動を始めたのは気仙沼でした。国内外での被災地支援の経験がある職員を派遣し、全国から駆け付けた多くの人たちと共に活動してきました。2011

年3月15日から東北沿岸部の調査を開始し、気仙沼市災害ボランティアセンターの立ち上げを支援し、点在する避難所に足を運んで炊き出しの調整や生活必需品を届けました。6月にはまちづくり支援、11月に蔵内之芽組の漁業支援など、地域に根ざした活動に取り組んできました。



地元の方々へパトタッチ！ 気仙沼事業は、次の一歩へ

私は漁師一家に生まれ、家業を継いで気仙沼で漁師をしていました。震災後、蔵内の浜に一艘残った船を頼りに同じ浜の漁師3人で漁業の協業グループ「蔵内之芽組」を立ち上げました。仲間6人に増え、2011年にワカメ、翌年からホヤ、ホタテの養殖を再開しています。それらの食材をつかった料理を「海の駅よりみち」で提供したり、道の駅でホタテなどを販売しています。

沿岸を離れ山側で暮らし

にぎわいを取り戻しつつあります。これからも浜に活気を取り戻し、水揚げを増やして売上を安定させ、漁業の後継者を育てていきたいです。



子ども支援

自然との触れ合いを通じ、子どもたちが本来持っている生きる力を引き出すためのプログラム「あつまれ、浜わらす！」を行い、次世代を担う子どもたちが海や山や森などの地域の自然の中でたくましく成長する姿が見られました。お年寄りや漁師など、地域の大人との世代間交流の場にもなりました。活動と理念は、2015年8月にシャンティの元職員と地域の方々で設立した「NPO法人浜わらす」に引き継がれました。



漁業支援

震災後に避難所で生活していた漁師の皆さんが漁業の再開を目指して「蔵内之芽組」という名の協働グループをつくられましたが、一隻の船以外は全てを失ってしまった状況に苦労されていました。そこでシャンティは今までのネットワークを活用して、学生のボランティアを募りワカメの種付けから収穫、「ホヤ祭」などイベントのお手伝いや、蔵内に住む女性たちが直売所と飲食店を兼ねたお店「海の駅よりみち」の広報などの漁業支援の活動を行いました。



まちづくり支援

2011年の夏、避難所の生活を経て仮設団地などへ移られた住民から「この先、どうなるのだろう」という不安の声が聞こえ続けていました。シャンティは個々の悩みを地域全体で共有し、共に悩み、共に解決していくことが人と人の関係の復興になり、それが被災した地域の「まちづくり」の基盤になると考え、この活動を開始しました。大谷地区、階上地区、登米沢地区を対象に、人が集う機会と場を設け、まちづくりの活動を行いました。



蔵内之芽組



蔵内之芽組
代表
及川淳宏さん



いわて を走る 移動図書館 プロジェクト

期間：2011年7月～2017年7月
活動地：岩手県陸前高田市、
大船渡市、大槌町、山田町

2011年7月17日。軽トラックの荷台にカラーボックスを載せた手作りの移動図書館車から始まりました。車の横に簡易テントを広げ、本を貸し出したり、お茶やコーヒーを提供したり、おしゃべりやお絵かきを楽しんでもらいました。大槌町では仮設団

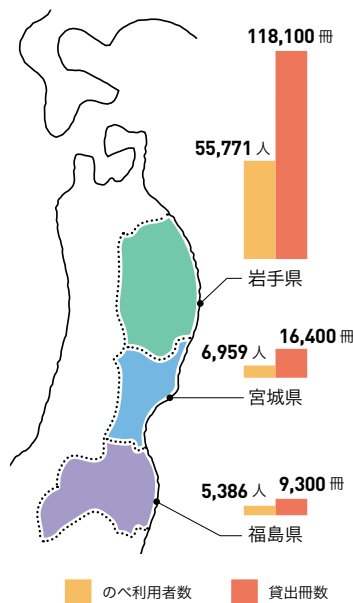
地を集会所に設置した本棚の本の定期的な入れ替えなどの文庫活動を、大槌町と陸前高田市の仮設団地内では常設図書室を運営しました。地元や外部の関係者と協力し、おはなし会、カフェなどのイベントを行いました。

震災で図書館や書店は大きな被害を受け、特に陸前高田市立図書館は建物、蔵書だけではなく、図書館員が全員行方不明または死亡という大きな被害を受けました。「こんな時だからこそ、今、出会う本が子どもたちの心の一生の支えになる」。被災して間もないころ、ある図書館員の方から聞いた言葉です。

震災後、岩手県の避難所では、全国から送られた善意の本が段ボール箱に詰まったまま、隅に置かれている様子も何度目にも見ました。ただ本を送るのではなく、人と人の触れ合いが生まれる「移動



移動図書館の
通算利用者数・貸出冊数



走れ東北！
移動図書館プロジェクト

岩手・宮城・福島では、震災により多くの図書館が甚大なダメージを受けました。震災からほどなく公共図書館サービスを再開した市町村もありますが、仮設団地からは通いにくいという課題もありました。そこでシャントイは、被災された方々の不安な気持ちを和らげ、生活に必要な情報を届けるため、仮設団地を移動図書館車で訪問してきました。本の貸し出しだけでなく、お茶を提供し、住民同士が自由に交流できる居場所づくりもサポートしてきました。他にも、集会所や談話室に設置した本棚の本を定期的に入れ替える文庫活動や図書室の設置、運営にも取り組みました。地域の図書館や読み聞かせサークルと連携して、合同イベントも実施しました。

支援活動紹介 2 移動図書館事業

利用者の声



毎日のようにお子さんと図書室に来ていた常連のAさん

「子どもたちが走って遊べるのでうれしくていつも連れて来ていました。子どもを遊ばせながら自分は編み物ができるのでとてもうれしい。夫は単身赴任で、家に帰ると悩むこともありますが、ここに来て息抜きできるので本当に助かりました」

「図書館活動」を行うことをシャントイは選びました。常連の方から顔を覚えてもらったことを喜ぶスタッフ。土地の習わしや歴史を地元の人に教わるスタッフ。移動図書館は出会い、交流の場として活躍しました。

歴代の 移動図書館車 のご紹介

「走れ東北!移動図書館プロジェクト」では、さまざまな移動図書館車が活躍しました。移動図書館活動の終了にあたり、移動図書館車は地元の方々に受け継がれています。



日産アトラス 4WD

2012年7月から主に岩手県の大槌町と山田町で活躍。車両内に本棚が設置され、雨や雪の日にも強い貴重な存在でした。活動終了後、2016年2月に岩手県遠野市立図書館へ譲渡されました。



マツダボンゴ

2011年12月から2017年3月まで、岩手県の大槌町と山田町、宮城県の山元町、福島県の南相馬市で活躍した車両です。車体横のハッチを開くと本棚が設置されています。



軽トラック

2011年7月、軽トラックにカラーボックスを載せた手作り移動図書館車から活動が始まりました。車の横に簡易テントを広げ、本を貸し出し、お茶やコーヒーを提供しました。

地元の方々へパトタッチ！ 移動図書館事業は、次の一歩へ

震災前から移動図書館活動の計画はあったものの、人手不足のため実施はできていませんでした。震災から3年、ようやく新たな展開ができるような雰囲気になり、南相馬市として移動図書館活動の開始を見据え、他の職員と共にシャントイの移動図書館活動に1年間参加させてもらいました。図書が貸し出しだけでなく、住民同士が集える場としての移動図書館活動の役割について考えるようになりまし。その後、シャントイから移動図書館車を譲り受け、災害公営住宅や幼稚園などを訪問しています。今後は、市の保健所と連携し、公営住宅で移動図書館活動と合わせて健康診断を行うなど、より多くの人が集えるようにしていきたいと思

南相馬市立中央図書館

高橋将人さん

2008年より南相馬市立図書館に勤務。震災後、行政の応援で市役所の社会福祉課に9カ月間勤務していた。現在は、南相馬市立中央図書館で移動図書館活動も担当。



移動図書館車と高橋さん

災害による死亡者の割合が高かった宮城県沿岸南部の山元町で、2012年9月から移動図書館活動を行ってきました。顔の見える活動を大切にし、運行先では地元のドライバーも加わって話の輪が広がりました。定期的にブックオフグループの従業員が運行に加わったことも特徴。地域の復興状況や利用される方々の動向を見て、2017年3月に活動を終了しました。最終運行日、利用者のご家族から「震災による不安がのしかかる日々の中、移動図

書館車が次に来る日が楽しみになったことで、「明日」があることを感じられるようになった」という、宝物のような言葉の詰まったお手紙をいただきました。私たちが活動で大切にしていたことが伝わっていたことを知り、とても嬉しく思いました。

みやぎを走る 移動図書館プロジェクト

期間：2012年9月～2017年3月
活動地：宮城県亶理郡山元町



ふくしまを走る

移動図書館プロジェクト

期間：2012年10月～2017年3月
活動地：福島県南相馬市

東京電力福島第一原子力発電所から20km圏内にある南相馬市小高区の住民が多く暮らしていた鹿島区と原町区の仮設団地を2012年10月から移動図書館車で定期的に訪問しました。その際、本を貸し出しながら利用者とのふれあいを大切にしてきました。災害公営住宅への引越をはじめ、仮設団地住民の減少に伴い利用者数は減りましたが、その分スタッフとじっくり話をしていられる方が増えたように感じられました。また、仮設団地から引越越した方が移動図書館の訪問時間に合わせ

てやって来られ、仮設団地に住んでいる方たちとの再会や交流を楽しむ場面もよく見られました。運行をサポートしてくださる企業、寺院、図書館、行政との輪も広がりました。町の復興状況や利用者の推移を見て、2017年3月に貸し出しを終了し、移動図書館車は宮城県小山市に寄贈しました。



復興支援から生まれた取り組み

シャンティの復興支援活動にご協力くださった企業、団体、寺院から、新たな支援の取り組みが生まれています。



東長寺

東京・新宿にある東長寺は、気仙沼の清涼院と震災前から交流があり、「NPO法人 浜わらす」の活動を応援しています。毎年夏に、東京の子どもたちを連れて、浜わらすのプログラムに参加し、気仙沼の子どもたちとの交流を行っており、シャンティのスタッフも同行しています。



あんでねっと

編み物を“あんで”、“ネット”ワークを広げようと、2011年から避難所を経て仮設団地で女性たちが集い、地元の特産品である海の生き物をモチーフにした手作りのアクリルたわしを販売しています。「今度は自分たちも支援したい」と売り上げの一部をシャンティの教育支援に還元してくださっています。



ブックオフコーポレーション株式会社

月2回、社長をはじめ、従業員の皆さんが山元町を訪れ、移動図書館の運行を手伝っていただきました。共に被災地に元気を取り戻すという気持ちで活動を続けられ、運行後に必ず振り返りの場に入ってもらいました。気づきや被災者のつぶやき、住民に喜んでもらえそうなアイデアを共有したおかげで、運行は日々改善されていきました。

福島事業では「南相馬に暮らす人々が心穏やかに過ごせること」を目指しています。福島で行っている活動は、山元事務所が南相馬市内で行ってきた移動図書館事業の流れをくむものです。移動図書館車で訪問を続けた仮設団地に暮らす人たちが、避難指示の解除後に故郷に戻った際に必要となる地域復興、コミュニティ再生のお手伝いが必要と考えています。具体的な活動としては、「集いの場づくり」を目指したサロンや趣味サークルの実施・企画や、地元団体による聞き書き活動に協力して、地域の魅力の再発見もお手伝いしています。また、講演会やSNSによる情報のやりとりを通じて、被災地と呼ばれた地域が孤立せず、地域外から関心が寄せられている状況を作り出したいと思っています。



支援活動紹介 3

福島事業

聞き書き活動のお手伝い

小高区の懐かしい写真を上映しながら、当日集まった地元の人たちの思い出を共有するイベントを手伝いました。そこで出た子ども時代の遊びや食べ物の話、戦争体験などは、故郷の生活文化を文集などの形で残して伝えていく、地域の聞き書き活動につながっています。



チャリティ寄席

東日本大震災の影響で、長年にわたり避難生活を余儀なくされた南相馬市小高区は、2016年7月に避難指示が解除され、高齢者を中心に2割程度の住民が帰還したものの、まだまだ街が活気づくまでは至っていません。シャンティは、元気で楽しい場づくりのお手伝いとして「チャリティ寄席」を企画しています。



ミニアルバムワークショップ

南相馬市のある仮設団地では住民が運営する「自主サロン」が月2回開催されていました。大変仲の良いサロンですが、いつかそれぞれの道を歩みだす時のことを考え、楽しい思い出になる写真と手仕事の要素を取り入れた「手づくりの写真アルバム」作りを行いました。





東日本大震災の 支援活動を通して

シャンティ設立以来、最大の国内災害となった東日本大震災。青森から千葉に至るまで、広大な地域が被災し、津波による壊滅的な被害を受けた土地も少なくありません。

そこで目にしたのは、災害は平等にやってくるが復興には格差があることです。次の日からすでに日常生活に戻っている人もいれば、住む場所や家族、財産を奪われ、いまだに避難生活が続いている人がいる現実。そして、高齢化や過疎化など日常的に抱える課題が震災によって露呈して、加速度的にその課題が進行しています。

2017年12月、『試練と希望 東日本大震災・被災地支援の2000日』を明石書店より発刊する運びとなりました。ぜひ、「読いたただいたら幸いです」。

常務理事 市川 斉



岩手事務所のスタッフ



気仙沼事務所のスタッフとボランティア

岩手事務所

陸前高田市モピア仮設団地の集会所に設置した陸前高田コミュニティ図書室では、2014年に利用者の方々による「友の会ブックマ」が立ち上がりました。図書室までの案内の看板や「開館のお知らせ」ボードを

設置したり、利用者に喜んでもらえるようにおいしいコーヒーの入れ方を学んだり、プランターの花壇をつくったり、図書室が住民の憩いの場となるようサポートをしてくださいました。



「友の会ブックマ」のミーティング風景

皆さま、まことに
ありがとうございました！

**活動を
支えてくれた
仲間たち**

復興支援活動には、個人企業、寺院から数百人の方々が参加してくださいました。中には、海外から駆けつけてくれた人、大学を1年間休学して関わってくれた学生もいました。活動を支えてくれたすべての仲間を紹介することはできませんが、彼らの協力があったからこそ、活動を続けることができました。

気仙沼事務所

事務所開設直後から多くのボランティアが活動を支援してくれました。5年間で約300人以上が活動に参加し、地域に溶け込み、関係をつくり、その中から生まれた支援活動もありました。

ぶんぶん谷



1

ぶんぶん谷に住むライライく
んのものがたり。あっちでも
ぶんぶん、こっちでもぶんぶ
ん。みんなぶんぶんおこっ
ています。

2

「ひとりであるほうがずっと
いいや」。ライライくんはぶ
んぶん谷を飛び出しました。



3

するとニコリ岬のおじいさ
んに出逢いました。「キミは
地球に招待されて、ここに
いるんじやよ」。突然、目の前
に、いくつもの扉があらわれ
ました。



4



「おじやまします」と言っ
ておじいさんは扉を開けました。
「ここは海のセカイ。いきものは
めぐりめぐって命をふやし
ていくんじやよ」

5

ここはニコリ岬じや。100
年前、なにかも失ってかな
しみのセカイと言われていた
んじや。でもみんなが笑顔に
なれるように願い、自然は恵
みを与えてくれるようになっ
たんじや。



6

「キミもニコリ岬に来るか
ら〜」
「ほくはもどるよ」。ライラ
イクんは、いっぼんの木を
植えました。



おしまい

活動の現場から

REPORT

From 岩手事務所・南相馬事務所

このページでは、
東日本の被災地で活動した
シャンティの様子や
スタッフを紹介します。

From 岩手事務所 東日本大震災被災地支援

2017年7月に陸前高田市立図書館が開館されたことにより支援を終了した、移動図書館活動。現地での6年間の活動の様子を振り返ります。



From 南相馬事務所 東日本大震災被災地支援

国内で誰も経験したことのない規模の原発事故の影響を受けた福島県南相馬市。シャンティでは2012年より、被災者が心穏やかに暮らすためのお手伝いをスタートしました。



3200人が乱舞した2017年8月5日開催の気仙沼みなとまつり



紹介者：畠山友美子さん



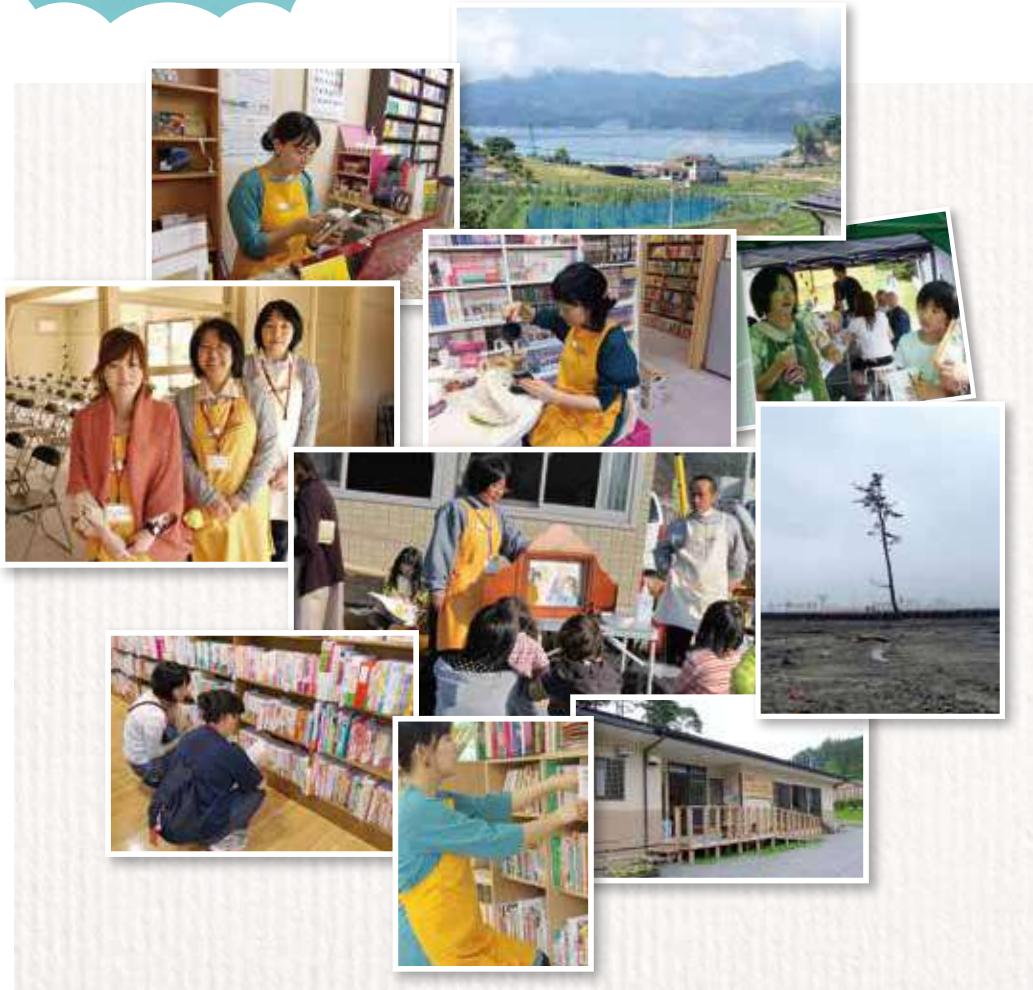
畠山さんが所属する「Uemirai大谷」

気仙沼の夏を彩るお祭りは、2017年の開催で66回目となりました。2日間にわたって開催されるお祭りの一番の見どころは3200人も参加者による「はまらいんや踊り」。はまらいんやは、気仙沼弁で「輪の中にどうぞ一緒に入ってください」といった意味を持ち、地元のソウルダンスとなっています。当日は、小中学生や企業など70以上の団体が集結し、大きな円を描きながら踊り続けます。誰でもみんな楽しく参加しようというムードがあり、参加者も観覧客もみんな一緒になって楽しめます。子どもから大人まで、地元の人々が一緒になって楽しむことで、人と人とのつながりや居場所が生まれ、長い間愛され続けていきます。震災からの復興を後押しする、地元の大切なお祭りです。

わたしたちの

お祭り

宮城県気仙沼
気仙沼みなとまつり



From 岩手事務所 東日本大震災被災地支援

約6年にわたる支援活動に幕を閉じた岩手事務所。被災者でありながら、支援活動に参加した元スタッフに今の想いを聞きました。



避難生活を送る中
支えられる側から支える側へ

2011年、私自身も被災し、多くの方々からの支援のなか、避難生活を送りました。仮設住宅への引越しが決まったころ、シャントイの移動図書館活動が開始されることを耳にし、支援される側から支援する側へまわられたらと、シャントイの活動への参加を決めました。シャントイは2011年7月、仮設団地を訪問し、本を届ける移動図書館活動をスタート。活動当初は軽トラックでまわっていましたが、車の中に本棚を積んだ移動図書館車に変わり、拠点も山田・大槌班の「かねざわ図書室」と、大船渡・陸前高田班の「陸前高田コミュニティ図書室」に分かれ、被災者に寄り添った活動へと発展しました。6年間にわたった岩手事務所の活動は、復興復旧した地元図書館や地元の団体へ引き継ぎ、2017年7月に支援活動を終了しました。

支援終了後も地域の人々が
安らげる居場所として

陸前高田コミュニティ図書室は、利用者との交流も多く、地域住民の居場所としての役割も果たしてきました。そのため、岩手事務所の活動が終了した後も図書室は継続されることになりました。ここで出会った人たちがつながりを持ち、みんなの安らげる居場所であり続けられたらうれしく思います。



元岩手事務所図書館プログラム担当
吉田 晃子 よしだ あきこ さん

PROFILE

東日本大震災で被災し、モビリアセンターハウス避難所で避難生活を送りながら、物資担当を務める。仮設住宅へ移るタイミングで、シャントイの活動に参加。岩手事務所図書館プログラム担当として活動。



岩手事務所
活動年表

From 岩手事務所 現地スタッフの活動

岩手事務所が運営してきた陸前高田のコミュニティ図書室の活動を紹介します。

元コミュニティ図書室スタッフ

金野 悠さんの 活動内容を紹介します

PROFILE

夫と3歳の娘との3人暮らし。クロスオーバー、アシッドジャズなどの音楽鑑賞が趣味。休日はガーデニングなどをしながらゆっくり過ごしています。



本の方で人は変わることができる

小さいころから本が好きで、震災後に何か自分ができることはないかと考えていたところ、コミュニティ図書室の求人を見。自分の好きなことで人の役に立てたらと、2012年に入職しました。

震災直後は深い悩みを抱えている利用者もいらしたのですが、本を借りるたびに変わっていく姿を目の当たりにしました。最初はしばらくとめくって見ていただけ

の本が、時間が経つにつれてしっかり読み込む小説になり、働く気力が出てきたりしていく姿を見て、本によって人は変わることができるのだと感じました。

本は、読む人をどこにでも連れていってくれます。たくさん知識を与えてくれ、辛い状況にあっても、本を読んでいる間だけはそれすらも忘れさせてくれます。コミュニティ図書室の活動により、本の力を改めて実感しました。

図書室での主なお仕事



1 開館前の準備

毎朝、準備作業を行います。お湯をわかして麦茶を作り、新聞を差し替え、本の整理整頓などをします。

2 利用者との交流

本の貸し出しだけでなく、本のお話を聞くなどのコミュニケーションも。子どもたちに絵本や紙芝居の読み聞かせも行います。

3 催し物の実施

2016年6月から本格コーヒーの日を開始。他にもラジオ体操やウォーキングの日など、さまざまな催しを行いました。

4 利用促進会議

コミュニティ図書室をより多くの人に利用してもらうために、どんなことができるか、みんなで意見を話し合いました。



クラウドファンディングからスタートした『陸前高田市の空っぽの図書室を本でいっぱいにするようプロジェクト』

シャンティでは、2012年、クラウドファンディング「サービスReady for」を通じて、陸前高田市でシャンティが運営する図書室を本でいっぱいにするプロジェクトへの支援を呼びかけました。ご支援くださった皆さまのおかげで、図書室を本でいっぱいにする事ができました。

同年4月に陸前高田市のモビリア仮設団地の集会所内に設置した常設図書室は、市立図書館の市の中心部への移転・再開に伴い、シャンティによる活動を終了しました。その後活動は、仮設団地の見守り活動をしている地元NPO「陸前たかだ八起プロジェクト」に引き継がれ、本の貸し出しだけでなく、飲み物を提供しながらのおしゃべりなど、以前と同様、住民の方々が気軽に立ち寄れる場となっています。代表の蒲生哲さんによると、震災から6年以上経過し、陸前高田市内の復興状況は地域によって開きはあっても、市内東部地域は市街地に比べて再建が進んでいるようです。しかしながら、新しいコミュニティで孤立した人を生まないためにも、居場所づくりの必要性が高まっています。モビリアの図書室は、近隣地域の方々も利用されており、向こう2年間はモビリア仮設団地が存在することから、引き続き住民に寄り添いながら支援活動を続けていきたいと考えています。

Hot Topics

①場づくりも公共図書館に引き継ぎ

移動図書館車と共に、ほっとひと息つける場づくりも南相馬市立図書館へ引き継ぎ。現在は、南相馬市内の災害公営住宅への訪問に同行し、利用者のお話し相手になるお手伝いをしています。2017年3月まで4年半、仮設団地への訪問を続けたこともあり、その時の利用者にお会いする機会も多くあります。



1

②聞き書き活動のお手伝いが形に

地域団体「まなびあい南相馬」の聞き書き活動の聞き取りや原稿起こしのお手伝いをしています。懐かしい思い出を語るうちに、話し手の皆さんに活気がよみがえるようです。お聞きした昭和初期の遊びや戦争体験などのお話が本になりました。現在、2018年春発行の第2巻作成中です。



2

3

③サロン寄席で笑ってストレス解消

南相馬市社会福祉協議会が小高区で開いている高齢者サロンへ2017年4月から参加者のお話し相手として伺っています。11月8日には、公益社団法人落語芸術協会に協力いただき、サロン内で落語会を開催し、大好評でした。皆さんが集まりたくなる場づくりの協力を続けていきます。



南相馬事務所長
古賀 東彦 こはるひこ

PROFILE

編集者として20年あまり活動。2009年よりシャンティの本で寄付するプロジェクトなどを担当。2011年6月、岩手事務所現地責任者として岩手県遠野市に赴任。以後、岩手事務所長、山元事務所長などを経て、現職。

苦しい状況下でも
笑うことの意味を感じて

毎日の活動の中で、自分の両親
くらいの年齢の方とおしゃべりす
る機会がとて多いのですが、そ
れぞれの暮らしの中での楽しい話
を聞かせてくださり、気づけばい
つも皆で笑ってきたような気がし
ます。どんなに苦しい中、悲しい
中でも、笑うことの意味を感じ、
考えさせられる日々です。



From 南相馬事務所

東日本大震災被災地支援

仮設団地への移動図書館活動が2017年3月に終了。
住民の帰還が始まった現在も、シャンティの支援
活動を継続しています。



避難生活から帰還後も
心穏やかに暮らすために

シャンティは、2017年3月
まで、仮設団地を訪問する移動
図書館の活動を続けてきました。
南相馬では、地震や津波の被
害に遭った人だけでなく、原発
事故により避難生活を強いられ
風評被害に悩まされた方が大勢
います。

まちが復興するには、多くの
人でにぎわうことが欠かせない
と思いますが、シャンティは帰
還に対しては中立の立場を取っ
ています。国や行政の方針とは
異なることもあるため、活動の
加減、歩調の合わせ方で戸惑う
こともありました。

仮設団地での図書館活動中に
ご縁のできた方々を含め、避難
生活を強いられた皆さんが、少
しでも心穏やかに暮らしてい
くためのお手伝いができればと
活動を続けています。

REPORT



①朝日座
大正末期の芝居小屋が元。現在も映画イベントなどで活用。国の登録有形文化財。



②野馬追の街灯
地域を彩る文化や伝統をモチーフにしたものがまちのあちこちに。



③南相馬市立中央図書館
原ノ町駅の目の前。小高、鹿島の分館を含め、蔵書数30万冊以上。



JR常磐線 原ノ町駅
南相馬事務所から徒歩3分。仙台駅まで約1時間20分と便利。



JR常磐線 小高駅
2016年7月に再開。朝夕、県立高校に通う学生たちでにぎわう。



南相馬事務所の
周辺
スポット



南相馬事務所つて
こんなところ

From 南相馬事務所 現地スタッフの1日

仮設団地から、もとの居住地に戻ったり、災害公営住宅へ移り住む流れも出てきた南相馬市。現地スタッフの今の活動の様子を紹介します。

南相馬事務所 古賀所長の1日に 密着

PROFILE
朗読ボランティア、音訳ボランティアとして活動する中で、シャンティの活動に興味を持ったことがきっかけで入職。入職9年目。



東日本大震災と福島第一原発事故からの復興に挑む南相馬市

かつて避難指示のあった地域では、現在もスーパーや病院などのインフラが十分には整わず、今後、過疎・高齢化が一気に進むことが懸念されています。「南相馬に暮らす人々が心穏やかに過ごせること」を目指して活動中です。



週末

お話し会で読み聞かせ



地域の文庫などが主催するお話し会に参加します。読み聞かせの機会をいただくことも。

聞き書き活動に参加



地元団体の聞き書き活動をお手伝い。土地の「今」につながる話は興味深いです。

リラックスタイム



休日は、ウクレレや鼻笛などの楽器を演奏したり、ペーパークラフトを作ったりして楽しんでいます。

隣接する町村を訪問



浪江町や飯館村を訪れることも。仮設商店街や道の駅でランチをしました。

平日



10:00 サロンのサポート

午前中は、社会福祉協議会が市内小高区で行っている高齢者サロンで、参加者のお話し相手に。



12:00 昼休み

小高区役所1階のカフェでランチ。この日は、カフェに出店している就労支援センターのお弁当を食べました。



13:30 移動図書館のサポート

午後は小高区の災害公営住宅を訪問。仮設団地で知り合った方と再会できることも。



9:15 活動準備



市立図書館の移動図書館活動で出すコーヒーなどを準備します。



9:00 線量計確認



外部被ばく量の積算数値の記録をつけるため、線量計の数値を確認。*



8:55 出勤

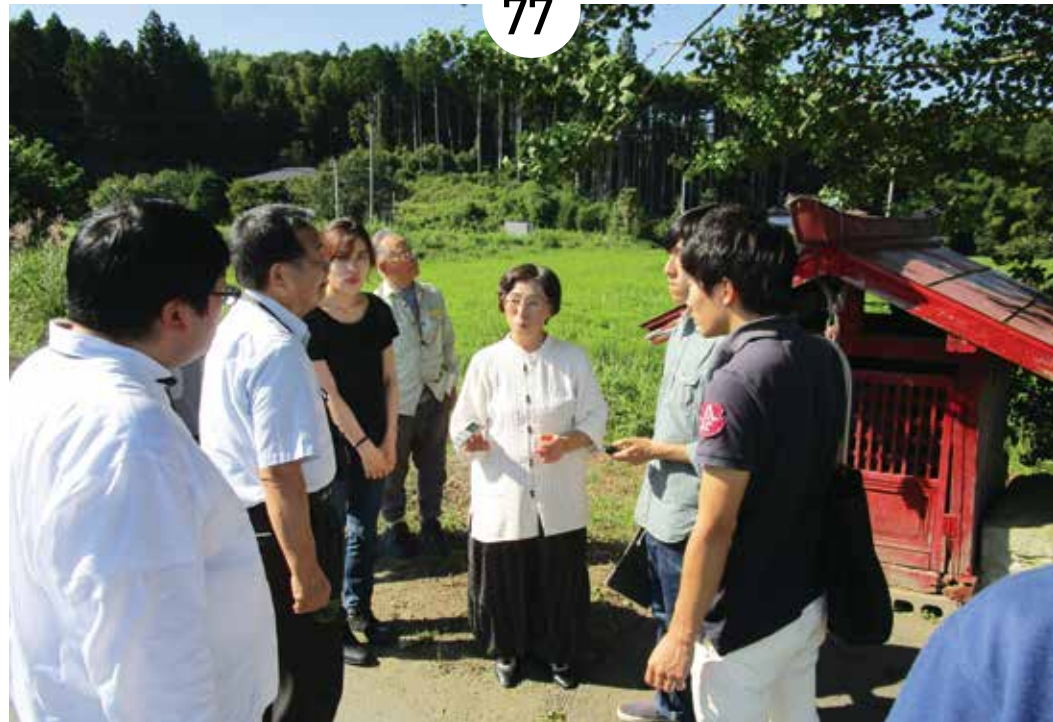


9時前に出勤。まずはメールの確認。

南相馬事務所地域復興のサポートを続けています

事務所を置く南相馬市は、2006年に鹿島町、原町市、小高町が合併してできました。国の重要無形民俗文化財「相馬野馬追」や北泉海岸のサーフィンなどで知られていましたが、2011年の東日本大震災で大変。小高区を中心に、多くの住人が避難を強いられました。現在、帰還困難区域を除き、避難指示は解除されて、住民の帰還が始まっていますが、小高区の居住者数は震災前の2割に届きません。暮らしていた元の家に帰るといっても、5年以上の空白期間があります。南相馬事務所では、移動図書館車で訪問を続けた仮設団地に暮らす方々が、避難指示の解除後に故郷に戻った際に必要となる地域復興、コミュニティ再生のお手伝いが必要と考え、日々の活動に取り組んでいます。

* 現在、外部被ばくの心配はほとんどないと言われています。



高橋美加子

北洋舎クリーニング代表取締役。任意団体「まなびあい南相馬」代表。2011年4月福島県中小企業家同友会相双地区会長に就任（2015年3月まで）。2014年4月（南相馬市）原町商工会議所女性会会長に就任（2016年3月まで）。

高橋美加子さんは、福島県南相馬市で活躍する経営者であり、同市を拠点にさまざまな社会的活動も行っていきます。東日本大震災においても、原発事故による強制避難という未曾有の経験をした南相馬市において、市民による救援・復興活動にいち早く取り組みました。シャントイとの関係が約30年に及ぶこともあって、シャントイが南相馬市内で支援活動を開始する際にも、親身に相談のつてくださいました。今回は、高橋さんが代表を務める「まなびあい南相馬」の活動を中心にお話を伺いました。

東京電力福島第一原子力発電所の事故は、原発20km圏、30km圏が描く円が市内を横断する南相馬市に、家族や仲間さえ分断する大きな被害を与えました。

高橋美加子さんは、2011年に南相馬で立ちあがった復興活動の多くに、中心メンバーとして関わってきました。主に、気持ちも住まいもばらばらになった南相馬市民が再びつながる道を探る任意団体「つながる南相馬」、放射能の影響で戸外活動を制限されていた子どもたちの保養プログラムとして生まれたNPO法人「南相馬子どもつばさ」、対話を通じて未来の南相馬像を模索する集まり「南相馬ダイアログ」などがあります。

これらは、震災が起こったから始まった活動ともいえませんが、高橋さんにとっては、幼かったときの生活環境、受けた教育、人のつながり、高橋さんが考えるあるべき社会の姿など

が関係し合っているので、個々の活動を単純に切り出して説明するのは難しいそうです。シャントイとの関係にしても30年来のもの。「シャントイが曹洞宗ボランティア会と言っていたころからのおつきあいです。貧困の中で教育は、人間性を保ち、前に進むために欠かせないもの。そう強く感じていたので、図書館や本の活動を支援しよう」と。南相馬市から離れられなかったのも、それでもできる支援として、シャントイの会員となったたり、フェアトレードの製品を買ったり。クラフトエイドはアジアの手仕事の素晴らしさに引かれて、たくさん買いました」と高橋さん。今、フェアトレードの店を南相馬でと願っているそうです。

高橋さんがいま熱心に取り組んでいるのが、自ら代表を務める「まなびあい南相馬」の活動です。2015年9月の発足後、乳幼児と保護者、小学生を対象に、

東京の演劇NPOと共同で、身体を動かしたり声を発したりしながら気持ちを開放させるワークショップの開催、南相馬市に暮らす高齢者が幼いころの遊びや戦争体験を話して聞かせる中で、誇りや生きがいを見つめ直す聞き書きなどを行ってきました。子どもでも高齢者でも、活動を通して変化が見られるのがうれしいそうです。シャントイもこれらの活動を一部お手伝いしています。

「みんな違っていい、そのみんなが生き生きしている」。高橋さんは多様性を大切にしたいと言います。震災後、絶望と混沌の中で、高橋さんは、市民が未来を思い描くためにファシリテーションの可能性を知りました。ひとりひとりが主体的に表現する力を持ち、まちづくりのために行動する。そのためにも、高橋さんは、「まなびあい南相馬」でファシリテーターを育成していきたいと願っています。

聞き手：南相馬事務所長 古賀東彦



乳幼児向けワークショップの様子



聞き書き活動

シャンティからのお知らせ

2018年度総会のお知らせ

2018年度総会を下記の通り開催いたします。総会での議決権がある社員会員のみさまには、3月初旬に資料をお送りします。シャンティの事業内容について詳しくご説明する機会となります。賛助会員の皆さまもぜひご参加ください。総会に合わせ、事業サポート課 課長の山本英里による講演会も企画しております。

日時：2018年3月24日(土) 13:30~18:40
会場：聖心グローバルプラザ
(東京都渋谷区広尾4-2-24) ※元JICA地球ひろば
主な議題：2017年度事業報告・決算報告について
2018年度事業計画案・予算案について
プログラム：第一部 2018年度定時社員総会
物故者追悼、永年会員表彰
第二部 講演会
第三部 懇親会
申込方法：電話、FAX、メールでご連絡ください。
(社員会員の方には2月下旬、出欠確認のハガキをお送りします)

人事のお知らせ

●入職
吉田 圭助
東京事務所 支援者リレーションズ課(11月1日付)

編集後記

子どもが生まれ、ベビーカーで出かける機会が増え、街中のちょっとした段差や階段が気になるようになってきました。それまで気にも留めなかったお店の入り口や駅の階段が、ベビーカーや足の不自由な人、車イスを使う人の行動を制限するものだと改めて実感しました。子どもと一緒に、親として日々新たな学びを積み重ねていきたいと思います。

(召田 安宏)

新刊のご案内

2017年12月、新刊が2冊発売されました。



『わたしは10歳、本を知らずに育ったの。』
(合同出版)
公益社団法人シャンティ
国際ボランティア会(編)
鈴木晶子、山本英里、三宅隆史(著)

アジアには本を知らない子どもたちがいる一方、1冊の本から生きる希望を見つけた子どもたちもいます。子どもたちのために、いまわたしたちにできることをご紹介します。



『試練と希望
東日本大震災・被災地支援の2000日』
(明石書店)
公益社団法人シャンティ
国際ボランティア会(編)

東北に寄り添い続けたシャンティの6年間の軌跡と、支援活動を通じてシャンティが得た教訓をまとめた一冊です。

シャンティ 2018年冬号(通巻293号) | 2018年1月1日発行

発行人：若林恭英
発行所：公益社団法人シャンティ国際ボランティア会
〒160-0015東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階
TEL 03-5360-1233 FAX 03-5360-1220
WEB: www.sva.or.jp E-Mail: info@sva.or.jp
編集人：関尚士
編集・制作：株式会社文化工房
印刷：株式会社サンエー印刷

当会へのご寄付は、所得税、住民税、および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。
©Shanti Volunteer Association.
「シャンティ」は、FSC®森林認証紙にノンVOCインキ(石油系溶剤0%)で印刷しています。



シャンティ国際ボランティア会が、アジアや日本で活動した歴史を振り返ります。

SHANTI HISTORY

SINCE 1981

2011

— 設立30年目に起きた大震災 —

カンボジア難民キャンプから活動を始めたシャンティが30周年を迎えた年。東北地方を中心に未曾有の被害を引き起こした、あの震災は起こりました。スタッフが見た2011年の景色とは……?

困難な環境に置かれているアジアの子どもたちが、文字を覚え、知識を広げ、人の喜びや悲しみを理解し、自然や文化を愛する心を培ってほしいと願い、30年間教育支援に取り組んできたシャンティ。「活動を通して出会った方々と、支援を必要としている方々との「かけはし」になることが目標」年始めにそんな活動への想いを綴った2011年、東日本大震災は起きた。

震災後すぐにスタートした若手県南部から宮城県北部での支援活動の中で、本当に多くの人と出会った。「3年後、三陸のワカメを食べに戻ってこい」そう言って差し出された漁師の手。「あとは復興させるだけだ」力強く、固く握られた青年の手。避難所で、自ら炊き出しを行うひび割れたお母さんたちの手。その手たちは、これまで、そしてこれから、どれだけ涙を拭うのだろう。どれだけ悔しさのためにこぶしを握るのだろうか。シャンティにできることといえはやはり、「かけはし」となることだった。支援者と被災者が、または被災者同士がその手を取り合うことで、被災者が「誰かと一緒に歩んでいける」と思うことができれば、そう願った。

もちろんこの年も、海の方こうでは各地域での支援事業を継続。本を届ける活動をはじめ、30周年プロジェクトとして、カンボジアを訪れるスタディツアーの開催や記念誌の出版を行い、より多くの人への支援活動の周知につなげた。この年、活動30年目の想いとともに、東日本大震災の支援は行われた。



カンボジアの子どもたち



気仙沼での活動